

G3 平成 24 年度活動報告

大森 肇, 坂本昭裕, 松元 剛

【1】これまでの経緯
(平成 21 年度～平成 23 年度)

筑波大学体育センターではこれまで科学研究費基盤研究 (A) 「知の競争時代における大学体育モデルの再構築に関する実践的研究」(平成 21～24 年度) に取り組んできた。SPERT (Sports & Physical Education Renovation in Tsukuba) と呼ばれる本研究プロジェクトの活動を通じて、筑波大学共通体育の新しい理念と新しいカリキュラムから成る「筑波体育」が再構築され、平成 23 年度からの実施に至っている。

本プロジェクトにおいてグループ 3 (G3) のめざした最終ゴールは、「筑波大学の共通体育における再構築モデルの実践と評価」であった。これは、「筑波大学体育センターの教育活

動を中心とした『大学体育』の過去の総括と現状把握」を目的とする G1 の活動と、「大学体育カリキュラムモデルの再構築」を目的とする G2 の活動との延長線上に位置付けられるものである。

平成 21 年度においては、まず「評価方法の確立に向けた情報収集」を行った。平成 22 年度においては、「再構築モデル『筑波体育』におけるカリキュラム評価のグランドデザイン」(図 1) を作成するとともに、その一部に位置づけられる「学生による授業評価」を実施した。またグローバル 30 プログラムに対応すべく、「学生による授業評価 (英語版)」も行った。さらに「学生による単元評価」の調査表を作成するとともに、「教員による授業の自己評価」を実施した。

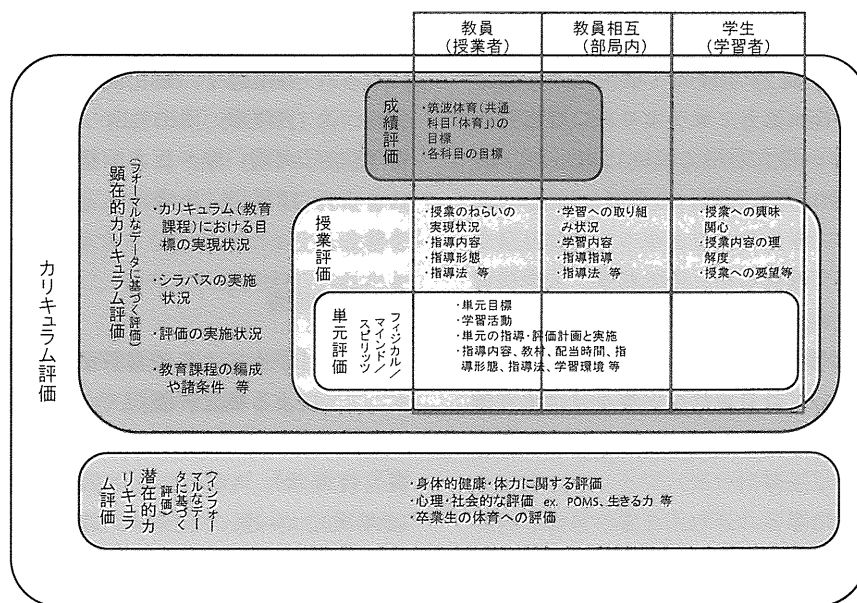


図 1 再構築モデル「筑波体育」におけるカリキュラム評価のグランドデザイン

平成 23 年度から、G1 および G2 の研究成果を基に再構築された筑波大学体育における新カリキュラムが始まった。平成 23 年度の成果として、以下の 4 点が挙げられる。1) 平成 22 年度の通年授業後に実施された「学生による授業評価」と「教員による授業自己評価」（共に新カリキュラムの評価基準による評価）を比較した結果、総じて学生による評価の方が教員による自己評価より高かった。特に「総合的な満足度」は高く、教員の指導法と授業計画・運営への高い評価がその背景にあることが観察された。2) 体育センター FD・危機管理委員会との共同により、複数の教員から推薦された教員 1 名を選定し、「教員相互による授業評価」を行った。授業の直接的な参観に加えて授業に関する意見・提案等が提出され、「静の中に動、個別と集団、一般論と各論など相対する内容がふんだんに取り入れられていて、幅広く、深い、内容盛り沢山の授業だった」という感想に代表されるように、他教員の授業改善に向けて大いに寄与するものであった。3) 新カリキュラムでは、学期ごとに「フィジカルリテラシー」、「スポーツマインド」、「スポーツスピリッツ」の各カテゴリーから科目を選択する新システムが採用された。平成 23 年度 1 学期の「学生による単元評価」を平成 22 年度の「学生による通年授業評価」と比べると、カテゴリーに呼応した教育目標で高い得点が出る傾向にあった。4) 「潜在的カリキュラム評価」の事例として、「大学体育が大学 1 年生のメンタルヘルスに及ぼす影響」について検討した。その結果、大学体育が大学 1 年生のメンタルヘルスに対し、ことごとく肯定的影響を示す訳ではなかったものの、評価項目によっては肯定的な影響を及ぼす可能性があることが示された。

【2】研究目的

平成 24 年度においては G3 のこれまでの成果に基づいて、新カリキュラムの多面的な評価

をさらに進めることを目的とした。評価項目が多岐にわたるため、今年度は G3 を 3 グループに分けて役割を分担する事とした。すなわちタスクフォース 3 (T3) は「顕在的カリキュラム評価」の内の「学生による授業評価」と「学生による単元評価」を、T4 は「顕在的カリキュラム評価」の内の「教員による成績評価」を、T5 は「潜在的カリキュラム評価」をそれぞれ担当した。

【3】構成員

○大森 肇、○坂本昭裕、○松元 剛、小俣幸嗣、本間三和子、山田幸雄、榎本靖士、金谷麻理子、鍋山隆弘、平山素子、安藤真太郎、秋山 央、吹田真士、奈良隆章、山田永子、桐生習作、向後佑香、村瀬陽介、岡出美則（体育専門学群）、門野洋介（仙台大学）、武田 剛（早稲田大学）、津田龍佑（金沢医科大学）、吉松（小田）梓（駿河台大学）、栗田昇平（体育科学専攻）、小峰昇一（体育学専攻）、鈴木隆文（体育学専攻）、下野貴史（体育専門学群）

< T3 > ○坂本昭裕、秋山 央、向後佑香

< T4 > ○松元 剛、山田幸雄、榎本靖士、金谷麻理子、鍋山隆弘、吹田真士、奈良隆章、岡出美則

< T5 > ○大森 肇、坂本昭裕、向後佑香、栗田昇平、小峰昇一、下野貴史

【4】活動報告

< T3 > 「学生による授業評価」および「学生による単元評価」

新カリキュラムは、スポーツを学ぶ「基礎体育」（1 年次）、スポーツ文化を学ぶ「応用体育」（2 年次）、スポーツで学ぶ・深める・構築する「発展体育」（3・4 年次）とから構成されている。また、新カリキュラムの特徴の 1 つとして、「基礎体育」を学期ごとに「フィジカルリテラ

シー]、「スポーツマインド」、「スポーツスピリッツ」の各カテゴリーから科目を選択する新システムを採用したことが挙げられる。T3では「基礎体育」を受講した学生による授業評価アンケートを分析することで、新カリキュラムを評価することに取り組んだ。

結果は以下の通りである。

1) 新カリキュラムにおける「基礎体育」の評価

平成22年度の授業評価(旧カリキュラム)と平成23年度の授業評価(新カリキュラム)の比較から検討した。新カリキュラムは旧カリキュラムと比較して、5つの「教育目標」すなわち「健康・体力とスポーツ技術に関する知識・思考力・実践力」、「豊かな心と社会性」、「逞しい精神と高い倫理観」、「スポーツ文化の解釈力」、「自立的な自己成長力」のすべてで有意に評価が高かった。新カリキュラムでは、「教育目標」の20項目の平均が6点満点中の4.78点(旧カリキュラム:4.63点)ということからも、体育センターが掲げる教育目標は概ね達成されていたと言えよう。しかし、「授業の運営・指導法」、「満足感」においては旧カリキュラムの方が高く評価されていた。これは、新カリキュラムでは単元ごとに重点化された明確な教育目標の設定がなされ、それが授業評価の観点と一致している事が反映したものと推察される。一方で、旧カリキュラムでは1種目を1名の教員が通年で授業展開するため、「授業の運営・指導法」や「満足感」で高い評価が得られたものと思われる。今後さらなるカリキュラム改善をめざすにあたって、興味深い知見が得られたと言えよう。

2) 「基礎体育」における単元評価

① 「基礎体育」の学期毎の比較

「基礎体育」における学期毎の評価の違いについて、単元評価から比較検討した。教育目標については、学期間では効果に違いはなかった。しかし、「学生の出席状況と熱意」、「授業の運営と指導法」、「授業への満足度」の項目では1学期の評価が高く、3学期の評価が低かった。

これは、3学期に入試や大学院最終試験等で授業回数が少なくなりがちな事や気温が低いという外的な条件がマイナスに作用したのかもしれない。

② 「基礎体育」の学習目標カテゴリー毎の比較

「基礎体育」における3つのカテゴリーの学習目標が達成されているかについて比較検討した。3つのカテゴリーは調査用紙の教育目標の項目に対応しており、「フィジカルリテラシー=健康・体力とスポーツ技術に関する知識・思考力・実践力の養成」、「スポーツマインド=豊かな心と社会性の醸成」、「スポーツスピリッツ=逞しい精神と倫理観の育成」となっている。結果として、6点満点中「フィジカルリテラシー:4.96点」、「スポーツマインド:5.07点」、「スポーツスピリッツ:4.63点」といずれも高い評価を得た。

「健康・体力とスポーツ技術に関する知識・思考力・実践力」ではすべてのカテゴリーで高得点が得られており、カテゴリー間の差は認められなかった。一方、「豊かな心と社会性」では「スポーツマインド」カテゴリーでの評価が高く、「逞しい精神と倫理観」では「スポーツマインド」カテゴリー、「スポーツスピリッツ」カテゴリー、の順に評価が高かった。これらの事から、各カテゴリーにおいて特に学習しやすい内容と、他のカテゴリーにおいても同様に学習できる内容の両方があることが明らかになった。今後カリキュラムを運営する上では、教材の持つ特性を生かしたカテゴリーへの割り振りと同時に、教員が担当するカテゴリーの教育目標を十分理解した上で教材研究を進めることが必要になるであろう。また、各カテゴリーにおいて教育目標として設定されている内容は概ね達成されており、1年間を通して3カテゴリーを受講することで、互いに補完し合ってより総合的な教育効果を上げられる事が示唆された。

< T4 > 教員による成績評価

大学における成績評価にGPA(Grade Point

Average)の導入が求められている昨今、体育においても「教員による成績評価」の検討をさらに進めていく必要がある。T4のめざした方向性は、同一科目複数教員担当授業における1)授業内容と体系化の標準化、2)成績評価の標準化であった。今年度は構成メンバーがSPERTプロジェクト内の公募研究に分担応募することで活動を遂行した。具体的には、①大学体育における学修成果可視化のためのルーブリックに関する研究、②大学体育におけるラーニング・ポートフォリオの活用、③大学体育における成績評価の妥当性と信頼性に関する研究、④一般体育における成績評価モデルの構築、の4研究テーマが進行中である。中でも①については、平成24年11月の日本スポーツ教育学会での発表を経て、体育センター内でも本格的な運用に向けての動きが始まっている。

会議は4月23日、5月7日、5月21日、5月28日、6月11日、6月18日、10月12日、10月29日、11月19日、11月20日、12月27日、1月21日の12回開催され、グループ内での情報交換および討論が行われた。また、情報収集、ヒアリング調査、学会発表などの活動状況は以下の通りである。

- 1) 2012年5月26日～27日：大学教育学会第34回大会（北海道大学）にて資料収集
- 2) 2012年6月2日～3日：日本高等教育学会第15回大会（東京大学）にて資料収集
- 3) 2012年8月22日～24日：日本体育学会第63回大会（東海大学）にて資料収集
- 4) 2012年11月10日～11日：日本スポーツ教育学会第32回大会（中京大学）にて口頭発表
「大学体育における成績評価方法の標準化に関する研究」（松元 剛、山田幸雄、榎本靖士、金谷麻理子、鍋山隆弘、吹田真土、奈良隆章、岡出美則）
- 5) 2013年2月1日：土持法一センター長へのヒアリング調査（帝京大学高等教育開発センター）

- 6) 2013年3月4日：日野克博准教授へのヒアリング調査（愛媛大学教育学部）

< T5 >潜在的カリキュラム評価

「再構築モデル『筑波体育』におけるカリキュラム評価のグランドデザイン」（図1）で挙げたように、学習目標に沿ったものばかりが学習効果として現れる訳ではない。そこでT5では、昨年度のG3活動の一つである「潜在的カリキュラム評価」に引き続き、今年度新たな事例を検討する事とした。昨年度は「大学体育が大学1年生のメンタルヘルスに及ぼす影響」について検討している。これは、入学時のメンタルヘルス状態がその後の心理的問題の発生や学業遂行との関連があると言われていることに着目したものである。1年生1学期における体育授業の初回と最終回との比較から、心理的側面での効果判定を行った。その結果、大学体育が大学1年生のメンタルヘルスに対し、ことごとく肯定的影響を示すという訳ではないものの、評価項目によっては肯定的な影響を及ぼす可能性があることが示された。

運動は気分を変えるのに最も効果的な行動であり（Thayer et al., 1994）、運動による快適経験は運動への好意的態度や内発的動機づけを高める（橋本, 1998）。また、運動有能感は自信やストレス耐性を育み、行動を積極的にする（日本学術会議, 2008）。体育授業に含まれる要素として身体運動が主体となることは当然であるが、授業に内包される要素はそればかりではない。教授者と受講生、また受講生間の関係性などを含む包括的な教育の場である。このような教育の場が受講生の心理的側面に影響を及ぼす可能性は高いが、そうした心理的側面とそれを裏付ける生理的側面の両方からこれを評価した研究は少ない。そこで今年度は、新カリキュラム「筑波体育」の受講生を対象に、「1回の大学体育授業が受講生の気分とストレス反応に及ぼす影響」について心理学的・生理学的に検討することを目的とした。本事例で特徴的な

は、既に大学生活にも慣れている2年生を対象とした「応用体育」であり、体育の受講に消極的になりがちな冬季（3学期）において、1回の授業が及ぼす効果を心理的・生理的側面から検討した点である。

被験者は共通体育「フィットネストレーニング」を受講した男性31名、女性24名の計55名であった。平成25年1月24日に行われた授業の前後で、気分尺度であるPOMS（Profile of Mood States）に回答させ、ストレス状況を反映するクロモグラニンAの測定に供するために唾液サンプルを採取した。また、測定当日の授業内における個人毎のトレーニング内容・体調等を記載させるとともに、スポーツの好き・嫌い、スポーツの得意・不得意、他の受講生や教員とのコミュニケーション、本授業における満足度に関するアンケート調査も併せて行った。さらに今年度1学期に実施した体力診断カードを提出させ、個人毎の体力データも収集した。現在、各指標について測定を進めるとともに、各測定指標間の関係性についても分析中である。

「潜在的カリキュラム評価」のバリエーションは無数にあると考えられるが、検討事例をさらに増やしていく事は、今後カリキュラムを改善していく上で有益な情報を得ることに繋がるものと思われる。

<その他>教員相互による授業評価

体育センターFD・危機管理委員会との共同により、年度末に行われた全体講義（2年生対象、4つの時間コマそれぞれ400～500名台の大型授業）を「教員相互による授業評価」研修の場として位置づけた。今年度はそれぞれの時間コマにおいて、4名の教員によるシンポジウム形式による講義が行われた。タイトルは「筑波大育を受講して」であり、4名の教員がそれぞれの専門性を生かした上で、共通テーマを掘り下げ、繋いでいくという試みであった。各教員の熱意と相まって、映像も駆使したテンポの

良い展開だったため、学生の集中度が高かったという評価を得た。一方で、講義全体のストーリーをいかに統一的に展開できるかという点において改善すべき課題も提示された。

<研究成果口頭発表>

- (1) 松元 剛, 山田幸雄, 榎本靖士, 金谷麻理子, 鍋山隆弘, 吹田真士, 奈良隆章, 岡出美則: 大学体育における成績評価方法の標準化に関する研究. 日本スポーツ教育学会第32回大会, 中京大学, 2012.11.
- (2) 向後佑香, 坂本昭裕: 大学体育が新入生のメンタルヘルスに及ぼす影響. 日本スポーツ教育学会第32回大会, 中京大学, 2012.11.
- (3) 大森 肇, 坂本昭裕, 小俣幸嗣, 本間三和子, 山田幸雄, 榎本靖士, 鍋山隆弘, 平山素子, 松元 剛, 安藤真太郎, 山田永子, 門野洋介, 桐生習作, 向後佑香, 武田 剛, 津田龍佑, 村瀬陽介, 吉松（小田）梓, 鈴木隆文: G3プロジェクトのこれまでの取り組みについて. <第3部 カリキュラム実践の評価>. 筑波大学体育センターフォーラム 大学体育の新時代に向かって, 筑波大学東京キャンパス, 2013.2.
- (4) 坂本昭裕, 向後佑香, 大森 肇, 小俣幸嗣, 本間三和子, 山田幸雄, 榎本靖士, 鍋山隆弘, 平山素子, 松元 剛, 安藤真太郎, 山田永子, 門野洋介, 桐生習作, 武田 剛, 津田龍佑, 村瀬陽介, 吉松（小田）梓, 鈴木隆文: 新カリキュラムにおける基礎体育の評価. <第3部 カリキュラム実践の評価>. 筑波大学体育センターフォーラム 大学体育の新時代に向かって, 筑波大学東京キャンパス, 2013.2.

<研究成果報告書>

- (1) 大森 肇, 坂本昭裕, 松元 剛: G3平成24年度活動報告. 大学体育研究, 35: 113-119, 2013

<原著論文>

- (1) 向後佑香, 坂本昭裕, 大森 肇, 秋山 央:
筑波大学体育センターにおける基礎体育の
評価—新カリキュラムはどのような成果
をもたらしたのか—. 大学体育研究, 35:
13-25, 2013.

【5】研究成果のまとめ

平成 24 年度は平成 21 ~ 23 年度の G3 の成
果に基づいて, 新カリキュラムの多面的な評価
をさらに進めることを研究の目的とした。

T3 では, 1 年次の「基礎体育」を受講した学
生による「授業評価」を分析することで, 3 つ
の観点から新カリキュラムの評価に取り組ん
だ。1) 新カリキュラムと旧カリキュラムの「授
業評価」を比較した結果, 新カリキュラムの方
が 5 つの「教育目標」のすべてにおいて評価が
高いことが明らかとなった。しかし一方で, 「授
業の運営・指導法」, 「満足感」においては旧カ
リキュラムの方が高く評価された。2) 学期毎
の評価の違いについて, 「単元評価」から比較
検討した。「教育目標」について学期間で効果
の違いはなかったものの, 「学生の出席状況と
熱意」, 「授業の運営と指導法」, 「授業への満足
度」では 1 学期の評価が高く, 3 学期の評価が
低かった。3) 3 つのカテゴリーにおける学習
目標の達成度合いについて検討した結果, 「健
康・体力とスポーツ技術に関する知識・思考
力・実践力」ではすべてのカテゴリーで高得点
が得られており, カテゴリー間の差は認められ
なかった。一方, 「豊かな心と社会性」では「ス
ポーツマインド」カテゴリーでの評価が高く,
「逞しい精神と倫理観」では「スポーツマイン
ド」カテゴリー, 「スポーツスピリッツ」カテ
ゴリー, の順に評価が高かった。これらの事か
ら, 各カテゴリーにおいて特に学習しやすい内
容と, 他のカテゴリーにおいても同様に学習で
きる内容の両方があることが明らかになった。

T4 のめざした方向性は, 同一科目複数教員
担当授業における 1) 授業内容と体系化の標準

化, 2) 成績評価の標準化であった。今年度は
構成メンバーが SPERT プロジェクト内の公募
研究に分担応募することで活動を遂行した。1)
大学体育における学修成果可視化のためのルー
ブリックに関する研究, 2) 大学体育における
ラーニング・ポートフォリオの活用, 3) 大学
体育における成績評価の妥当性と信頼性に関す
る研究, 4) 一般体育における成績評価モデル
の構築, の 4 研究テーマが進行中である。

T5 では, 「フィットネストレーニング」受講
生 (2 年生) を対象に, 「1 回の大学体育授業が
受講生の気分とストレス反応に及ぼす影響」に
ついて心理学的・生理学的に検討した。授業
の前後で, 気分尺度である POMS に回答させ,
ストレス状況を反映するクロモグラニン A 測
定のために唾液サンプルを採取した。また, 当
日の授業内における個々人のトレーニング内
容・体調等を記載させるとともに, スポーツの
好き・嫌い, スポーツの得意・不得意, 他の受
講生や教員とのコミュニケーション, 本授業に
おける満足度に関するアンケート調査も併せて
行った。さらに今年度 1 学期に実施した体力診
断カードを提出させ, 個々人の体力データも収
集した。現在, 各指標について測定を進めると
ともに, 各測定指標間の関係性についても分析
中である。

その他, 年度末に行われた 2 年生対象の全体
講義を「教員相互による授業評価」研修の場と
して位置づけた。「筑波体育を受講して」とい
うタイトルで, 4 名の教員によるシンポジウム
形式による講義が行われた。教員それぞれが専
門性を生かした上で, 共通テーマを掘り下げ,
繋いでいくという試みであった。各教員の熱意
と相まって, 映像も駆使したテンポの良い展開
だったため, 学生の集中度が高かったという評
価を得た。一方で, 講義全体のストーリーをい
かに統一的に展開できるかという点において改
善すべき課題も提示された。

G3 では, この 4 年間で「再構築モデル『筑
波体育』におけるカリキュラム評価のグランド

デザイン」に基づいて、さまざまな側面からのカリキュラム評価を行ってきた。大学体育のカリキュラム評価がこのように多くの観点から行われたことは少なく、意義深い試みであったと

考えられる。しかしながら、今回の「グランドデザイン」で示したカリキュラム評価のすべての側面について網羅的に分析できた訳ではない。今後のさらなる研究の展開が期待される。